

モスクワ滞在記Ⅱ

信州大理 勝木 渥

§2. 観察雑記（大学の外で）

スローガン モスクワに到着した日、郊外にある空港からインツーリストの車でホテルへ向かう途中、まず何よりも印象的だったのは道の両側に林立する高層アパート群であった。運転手に「アパートか？」ときいたら「そうだ」と答え「おれもそれに住んでいるのだ」と付け加えた。アパートの屋根屋根には赤い字のスローガンが立っていた。ぼくの記憶にのこったものを書いてみると、「共産主義へのレーニンの道に沿って」「万国の労働者団結せよ」「恒久平和と共産主義のために」。レニングラード・ホテルの部屋の窓から真向いに見えた建物の屋上には「われらの目標は共産主義だ」。このホテルのすぐわきを通る鉄道が道路を跨ぐ橋桁には「しかり、レーニンのコムソモールは健在なり！」「5ケ年計画が重要な課題だ！」。モスクワ大学の哲学・経済学部の建物の屋上には「しかり、ソ連共産党は健在なり！」。物理学部講義室にかかげられたマルクスの言葉はすでに紹介したが、中央館大講堂（国際会議の開会講演のあった所）にも演壇右手にマルクスの肖像とこの言葉が、演壇左手にはレーニンの肖像とおそらく「青年同盟の任務」中の一節と思われる「学問によって自らの知識を豊かにしてこそコミニストたりうるのである」という言葉がかかげられていた。

大学ホテルの横を走る道路の中央分離帯に赤地白抜きの大看板が建っていた。XXIVというローマ数字の部分だけはすぐ分った。国道24号線とでもいう類の標識であろうか、それにしても仰々しすぎると思って、辞書をひいてみたら、それは「ソ連共産党第24回大会の諸決定を実行しよう」と書かれているのであった。その途端にぼくははっと思いあたった。モスクワに到着した晩、ホテルの部屋の真向いの建物にみた「われらの目標は共産主義だ」というスローガンをぼくは一般的なスローガンだと思って眺めたが、これは実はもっと具体的な、つまり24回大会の決定をふまえての、ものではないのか。鉄道の橋桁にあった「5ケ年計画が重要な課題だ」というのは、この24回大会の決定のことではないのか。だが、ぼくは24回大会がいつ開かれたのか、どんなこと

勝木 渥

を決定したのか全然知らない。20回大会のことはそこでの画期的なスターリン批判のこともあってよく知っている。22回大会ごろまではおぼろげながら記憶がある。しかし23回、24回大会となると、もう全然知らない。開かれたことに気付きさえしていない。今、ソルジェニツィン問題などで対ソ的関心は一般的にはある。しかし、そういう関心はあっても、他方で、今ソ連がどんな目標をかかげどんな計画で社会主義建設をやらうとしているかについてはほとんど知らぬままである。ソ連に対して基本的に肯定的な評価を下すにしろ、基本的に否定的な評価を下すにしろ、ソ連の社会主義建設がそれを軸にして展開している24回大会決定の基本的な所だけは少くともちゃんと知っておきたいと思った。翌日アナトーリィに24回大会のことを聞いてみた。それは1971年の3月30日から4月8日まで開かれた。ここで新しい5ケ年計画をきめたのである。9月下旬に「5ケ年計画の千日目」という見出しで、収穫が順調に進んでいるという記事があるのを新聞でみた。アナトーリィに5ケ年計画はうまく進んでいるのか、と聞いたら、うまく進んでいる、と答えた。日本ではインフレで物価がだんだん上ってゆくがソ連ではどうか、ときいたら、上ってはいない、婦人物の衣類が近く若干値下げされる予定である、いって嬉しそうな笑顔をみせた。それは、自分の奥さんに安い衣類を買ってやれるのが嬉しいというよりは、5ケ年計画がうまく進んでいるのが嬉しいという、そういう笑顔であった。

こぜに ソ連には1, 2, 3, 5, 10, 15, 20, 50 カペイクおよび1ルーブリの硬貨がある。紙幣には1, 2, 3, 5, 10 ルーブルがある。50 R, 100 R などの紙幣もあるらしいが手にする機会がなかった。色からみて1~5 K玉は黄銅貨で3 K玉がちょうど5円玉の大きさ、5 K玉は10円玉より一廻り大きい。10 K ~ 1 R 玉 は色からみて白銅貨で20 K玉がちょうど100円玉と同じ大きさである。1 K, 2 K, 3 K, 5 K 玉にはそれぞれ特殊の用途がある。モスクワでは水(炭酸水)の自動販売機にいたる所でお目にかかる。日本のジュース類の自動販売機とちがう所は、コップが使い捨ての紙コップではなくて、ガラス(合成樹脂?)のコップが1つか2つちゃんと販売機に備えつけてある点にある。販売機には灌水装置がついていて、コップをその上に伏せてきちっと押すと水が噴水のように出てコップの内面を洗う仕掛けになっている。1 K玉を入れると炭酸水が、3 K玉を入れるとシロップ入りの炭酸水がコップ1ぱい分

出てくる。公園にある自動販売機ではこのシロップの出口の管の所に蜂が何匹も群れていたりした。2 K玉は公衆電話で市内電話をかけるときに使う。まず金を入れてから受話器を外しダイヤルをまわす。市内電話に時間制限はない。クワス（麦芽飲料）の自動販売機に5 K玉を入れると中ジョッキ1ぱい分が出てくる。必ずしも小銭を準備する必要はないが、市電が3 K、市内トロリーバスが4 K、市バスが5 Kである。交通料金の支払いは乗客のセルフ・サービスで料金箱に金を入れ、巻取装置のダイヤルを自分でまわして出てきた切符をとる。おつりの必要な人は乗客同志でやりとりする。やってみると一寸面白い。ぼくも一度トロリーバスで5 K入れ、料金箱のそばに立っていて、次の停留所からのりこんだ人が金を入れようとしたのを制止して1 Kおつりをもらった。何となくモスクワ通になったような気がした。味をしめても一度バスの中でやってみた。10 K玉を用意してバスにのり、人の払おうとした5 K玉を取りあげて、おれが10 K玉で一緒に払うといったら、その人があわてて、それは困る、といった。実はこのバスの料金箱は新式で1回金を入れてハンドルをガチャんとやると切符が1枚だけ出てくる。10 K玉を入れても1回しかガチャんとやれぬから切符が1枚しか出てこぬわけだ。そばで見ていた中学1年くらいの女学生がかばんから小さな財布をとり出して中の小銭を数えていたが、もう一枚10 K玉ないかときく。もう1枚出すと、かの女は15 K玉と5 K玉で、ぼくの10 K玉2枚を両替してくれた。トロリーやバスには前後2ヶ所の出入口があり、それぞれの出入口に料金箱がおいてある。料金箱というのはぼくらの感覚で、正しくは切符販売機というべきかも知れぬ。時に混み合ったバスなどで片方の出入口の方の切符が売りきれてしまっているようなことがある。そんな時、たとえ後の出入口からのった客の5 K玉が乗客たちの頭の上を何人かの手で順送りされて前の出入口の所に達し、そこで料金箱に入れられて代りに出てきた切符がまた何人かの手で順送りされて当人の手にとどく。こういう工合にして後の出入口からのった何人もの客が自分の切符を手に入れる。金をはらうことによってではなく、切符を手に入れることによって乗車の権利が生ずるかのようである。この切符はおりる時車掌に渡すなどということはない。そもそも車掌がないのだ。大抵はまるめてポケットのすみに入れたまま下車してしまう。

市電、トロリー、市バスは1回乗り切り制だが、地下鉄は乗換自由で5 Kでどこまででも行ける。地下鉄にのるときは自動改札口で5 K玉を入れると腕木がおりて1人だけ

勝木 渥

通してくれる。地下鉄料金はずっと長い間変わっていない。モスクワ大学の招待をうけて9月から2ヶ月モスクワに滞在した名大宇宙線の丹生さんと3週間ほど同じホテルにいたが、かれによると約10年前にきたときも交通料金は今と同じだったそうである。5Kは19円弱である。地下鉄を女の人が運転しているのを見たことがある。地下鉄の車内に「子供づれの乗客と傷兵のための席」とかいた席のあるのもみた。地下鉄の駅には10K, 15K, 20Kを5K玉に両替する自動両替機がずらりと並んでいた。

トランプ トランプの図柄は万国共通かと思っていたら、実はそうではなかった。ドルショップで安くて気のきいた土産物をと物色していたら奇妙なトランプがあった。1のカードにAではなくTと書いてあるのである。キングはKだがクインはロシア文字のD, ジャックはBと書いてあった。それぞれ Tuz, Korol', Dama, Valet (ロシア文字のVはローマ字のBと同形)の頭文字である。Valetはどういう意味かと辞書をひいてみたら、トランプのジャックと書いてあった。死語として召使いという意味がある。

Tuzもトランプやさいころの1という意味で、死語として権勢家・お歴々という意味がある。キングもクインもジャックも図柄は上下同形になるように2この胸像を反転中心をもつように上下に組合わせたものであるが、胸像そのものは写生の絵のようにふくよかで、われわれのみなれたトランプの図柄のように極端に図案化されたものではない。ひげのないキングはハートのそれだけでなく、すべてのキングにひげがない。ジャックも斧や長い棒はもってはおらず、クラブのジャックは本をもち、スペードのジャックはノートをまるめてもっていた。珍しかったので一組買った。観光客むけの製品かも知れぬと思って、のちにボリスのうちへ行ったとき、ソ連ではトランプをやるかときいてみた。「やるとも、やるとも。フットボールの試合をみたあとは、一ぱいやりながらトランプるやるのが常である」といって、ボリスはかれのトランプをみせてくれた。よく使ったとみえて、よごれたくたびれたトランプであった。図柄も文字も、ぼくの買ったトランプと同じであった。

ただの水 モスクワで売っている水は自動販売機のものであれ、びんづめのものであれ炭酸水かレモン水である。国際会議のとき中央館のホールで売っていたレモン水はコップ1ぱい6Kであった。(このコップは紙コップだった。) ある日、とてもものがか

わいていたので1びん買った。30 K だった。コップに移してのんだが、5 はい分はなかった。コップ1 ぱいづつ買う方が1びん買うより割得のようであった。

ただの水はないのかと思っていたが、実はそれがちゃんとあるのである。レストランで給仕が水の注文をきく。ビールでも（ビールは水の範疇に属するのである！）炭酸水でもレモン水でもなく、ただの水が欲しい時には「ただの水」と（勿論ロシア語で）言って注文すれば、水差しに入った、中空の氷を浮かべた、よく冷えたただの水が運ばれてくる。ただの水は^{ただ}無料である。

大学ホテルでのどがかわいたとき、デジュルナヤ（フロアの係のおばさん）に「のみ水はないか」ときいてみた。かの女は部屋の水道の水はのめる水だといった。半信半疑でいたら、そばにいた人が Drinking Water だと説明してくれた。

温水プール 今年のモスクワの初雪は9月22日だった。夕方6時頃ホテルの部屋に帰った時には冷たい雨が降っていたのだが、7時頃ちょっと雪になった。ふと目を窓の外にやったとき白いものが流れるようにおちてくるのがみえて、ぼくは思わず心の中で「雪だ！」と叫んでしまった。その翌日が秋分だった。雪は積もらなかったが、朝出勤してきたデジュルナヤがぼくの顔を見るなり「今日はとても寒い」といってからだをちぢめて身ぶるいしてみせた。この日プーシキン美術館に出かけた。先週大学ホテルのレストランで同席したハンガリーの若い法学者の一行（3人。女性1人を含む）がプーシキン美術館は是非見ろ、印象派の絵のすばらしいコレクションがある、と奨めてくれたせいでもある。10時開館のつもりで出かけたのだが着いてみたら11時だった。門のところにはすでに10人くらいが並んでいた。この寒空に1時間も立ちん坊するのはかなわぬと思って付近を散策した。この美術館の近くにはすぐ裏手にマルクス・エンゲルス博物館、やや離れた所にはプーシキン博物館、トルストイ博物館、科学者クラブ、ソ連平和委員会等の建物があり、またすぐ近くには、一年中泳げる露天の大プールがある。こんな寒い日だったが、子供たちがたくさん水着をもって泳ぎにきていた。プールの水面からは湯気がたっていた。

美術館（入場料は30 K）からの帰り、レーニン丘を散歩しながら帰ろうと思い、地下鉄「大学」駅より一つの都心よりの「レーニン丘」駅でおりた。地下鉄のこの線は「レーニン丘」駅のところが地上にあらわれ、この駅はモスクワ河をプラットホームが

勝木 渥

跨いでいる。この駅の付近には集中したスポーツ施設がある。駅前広場に出てみたら、向かいの体育館とおぼしき建物に向かって子供たちが行っては、入口の掲示らしきものを見てひき返してくる。何ごとかと思つて、ぼくもその建物の所まで行ってみたら、それは温水プールの建物で、入口の掲示には「プールの水があつすぎて、今日は泳げない」と書いてあった。何だかとてもおかしく愉快になって、レーニン丘へむかって歩きはじめたが、途中水着をぶらさげて体育館の方に向かう子供たちと何度も行きあつた。散策の途中にみたモスクワ大学の時計台の温度計は2℃をさしていた。

わさび ロシヤ人は大食である。アナトーリィによれば、ロシヤの冬は寒いからたくさん食べなくてはならない。夏になつてもその癖がぬけないから、いきおい食べすぎる。中年すぎた婦人（婦人だけとは限らない）に一般に肥満傾向があるのはそのためなのだそうである。アナトーリィも33才だったが下腹が少し出はじめていた。

かれらなみには到底たべられないので、朝、ひるは軽くパンと牛乳程度ですませ、平日は一日一回大学の食堂で閉店（夕方5時）まぎわに正餐をとることにした。まず前菜が出る。前菜というからまず口ならしの軽いものかという気がするが、必ずしもそうではなく、要するに冷たい料理なのである。だから冷たい肉料理や魚料理も前菜に入るし、ヨーグルトやバターなども前菜のうちだ。安いものではみじん切りの人参にスメタナ（ヨーグルト風のもの。ここではマヨネーズとでも思つておけばよい）をかけたサラダが5K、高いものではキャビヤが73K、えんどうをそえたローストビーフが42Kという所だった。30Kも出せばちょっとした肉入りのサユダが食べられた。次に第一皿と称して汁物が出る。スープ、サリャンカ、ブリヨン、ボルシチ、シチューなどがあるが、これらの間に汁の澄明度、どろどろさの具合、味の濃厚淡白等の差のあること、日本の清汁、味噌汁、呉汁等々の間にそれらの差のあることと相似ている。大体25K程度であった。ついで第二皿と称する主料理が出るが、これは安いもので例えばジャガイモのピューレと生キャベツをそえた焼魚（切身）が30K、高いものでヒレ肉のビフテキ（玉葱、焼きジャガイモ、えんどう付き）が70K程度であった。大体50Kくらいで一応のものが食べられる。最後にデザート、これはリンゴの生果汁が8K、コーヒー10K、アイスクリームなら20Kくらいである。（以上は大学での給仕のいる食堂——テーブルにつくと給仕が注文をききに來て客が注文する。代金はあと払い——での値段である。

他にセルフ・サービス方式の食堂もある。国際会議参加者はあまり給仕のいる食堂は利用しなかったようである)。大体1 R 50 Kも出せばかなりゼイタクな食事をとったという満足感を味あうことができた。少しけちけちした正餐のとり方をすると1 Rで少しおつりがきた。インツーリストのホテルでの朝食が1 Rでバタつきのパンと、ハム・エッグもしくは似たようなものと、コーヒーまたは紅茶程度のものであったと比べると、大学の食堂はぐっと割安である。(ついでに、大学ホテルの傍の食料品店で買った牛乳代をかいておけば、500 ccが16 Kであった)。

閉店まぎわに食堂に行くことにした理由は2つある。閉店が5時(セルフ・サービスの所は6時?あるいはもっと遅く)なので、夕食の時間としては、できるだけ遅い方がよいこと、もう1つはメニューのコピーを手に入れるためである。食堂の献立は毎日変っている。毎日その食堂の主任の署名入りでその日のメニューがテーブルの上についている。閉店すればその日の分は用がなくなるから、帰りにそのメニューをもらってくるのである。あとで辞書を引いて研究するのである。おかげで注文した料理についてのぼくのイメージと運ばれてきた料理の実物とが極端にくいちがうということはほとんど生じなくなった。この研究の副産物として、岩波のロシア語辞書も料理名に関してはかなり不備であることを発見した。例えばありふれた肉料理 *Azu* が辞書に載っていない(ついでながら *Ponchik* は「球形のパイの一種」と種いてあるが、これは実はドーナツのことである。なお、割合よく出てくる無人称動詞 *Khotyet'sya* が脱けているのはミスというべきであろう)。

ある日、前菜として冷たい豚肉を注文した。豚の腿肉が *okorok* であることはすでに覚えていた。つけ合わせはぼくの知らない言葉のものであった。運ばれてきた豚肉には大根おろし様のものが添えてあった。大根おろしよりもっと白が濃くて水気が少ない。それに豚肉につけて食べてみてびっくりした。わさびの味がするではないか! ぼくはとてものつかしい気がした。ロシアにもわさびがある! これはぼくには意外な大発見であった。

大使館の科学アタッシェの人のことをぼくは国際会議のときに金材研の能勢さんから聞いていた。モスクワ大学への滞在が本決まりになったとき、ぼくはそのことをこの人に連絡しておいた。ある日この人がぼくをドライブに誘ってアルハンゲリスコエに連れて行ってくれた。いろいろ親切にしてくれたあとぼくに「食事で困ることはないか。食

勝木 渥

べようと思ったものを注文できるか」と聞いた。モスクワに大分長くいる人でもメニューに書いてある料理の名前は珍紛漢紛で注文したつものものと違う料理が来てしまうのだそうである。ぼくはメニューをもらって来る話をして、「こういうわけで少しも困っておらぬ」と言ったら、「もし記念に持ち帰ろうという積りがなければ、それを頂けまいか」と申された。いろいろ親切にしてもらったお礼に、ぼくは帰国前に収集品の中から2枚ほど献上してきた。わさびのあることを話したら、「それは初耳だ」とのことであった。奥さんがすしを作ることもあるそうである。ぼくは、わさびのことを Kh-ren というのだ、とお教え申上げてきた。

ラジオ ぼくの最初に泊ったレーニングラード・ホテルのぼくの部屋にはやや時代もののラジオが備えつけてあったが、それにはつまみがひとつしかついていなかった。右へまわすと音が大きくなり、左へまわすと音が消えるのである。デジュルナヤが部屋の掃除をすましたあと音量を適当にしてラジオをつけたままにしておいてくれるらしく、ホテルに帰りついた時、ときにラジオから音楽が流れたりして、ちょっと良い気分だったりした。

ラジオ放送は朝6時に始まり夜12時におわる。始まりの時は、まず鐘の音が入って、「モスクワ放送、8月30日木曜日」というようなアナウンスが入り、アナウンサーが少し何か朝のあいさつをする。それから15分くらい男と女のアナウンサーが一区切ずつ交代で何かをしゃべっている。口調や断片的に判じえた隻語などから察するに、ニュースとかこの日にまつわる故事来歴について語っているらしい。6時15分にラジオ体操とおぼしきものが始まる。体操音楽を背景に、日本と同じように、1、2、3、4と号令をかけたり、右、左、右、左とか、まげて、のばして、とかあいのを入れたりしている。ぼくも時々この音楽と号令にあわせて我流の体操をやったりした。6時半までが体操の時間だが、ときに6時28分頃終わってしまっただけで「では皆さん、さようなら」と言っただけで、2分程ラジオが沈黙したままだったりする。6時半からニュースと覚しき放送が始まる。

つまみが1つしかないのはソ連式かなと思ったりしたが、9月になって大学ホテルに移って見たら、部屋に備えつけのラジオにはつまみが2つあった。1つは音量調節用1つはチャンネル切換え用である。チャンネルは3つあり、それぞれのチャンネルで放送をしてい

た。ラジオで話していることの中味は分らぬが、何について話しているかは聴いているうちに見当がついてくるので、あとで大学でアナトーリイやボリスにニュースの中味をたしかめたり、図書室の新聞で関係記事をさがしたりした。あるとき、その2、3日前からラジオでソ連＝ブルガリヤの友好関係がしきりに話題になり、ブレジネフ、ジフコフの名がしきりに出てくるので、てっきりジフコフがモスクワへでも来たのかと思って新聞でたしかめてみたら、ブレジネフがソフィアに行っているのがあった。日本の首相や外相は姓の語尾がAなので、Aの語尾をもつロシア語の名詞と同じ格変化をする。タナカ、タナキ、タナケ、タナク、タナコイ、タナケといった風なのである。新聞記事ではちゃんとこういう風に活用させてあった。外相についても同様であった。ただしラジオでは日本の外務大臣アヒーラという工合に発音していた(ロシア語名詞でちゃんとした「イ」の語尾をもつものがないためだろうと思うが、カツキや外来語タクシーは語尾変化しない)。ついでながら、日本の新聞もときに中央館ホールの売店で売っていた。もっともそれは「赤旗」で10日おくれほどのものがたまに1部おかれてあったりした。外国新聞は一律30Kである。ぼくも2度ほど「赤旗」を買った。「赤旗」は三面記事がなかなか豊富で、ぼくは立大助教授一家心中事件を「赤旗」でモスクワ滞在中に知った。ほかに労働組合の総評の機関紙「総評」が売店におかれていたこともあった。人民日報や北京週報はみかけなかった。(それでもぼくがヤロスラフ駅 — ここからは極東行きの列車が出る — の時刻表を見た限りでは北京行きの直通列車が週2回ここから出ている。所要時間約130時間とかいてあった)。

ダイヤル式の、同調周波数を連続的に変えることのできるような、ラジオはソ連にはないのか、と長い間思っていた。帰国直前に、本を送ったりするために大学ホテル内にある郵便局 — ホテルの中に郵便局があるのである。これは実に便利だ! — に行ったら局員(中年の婦人だった)が、日本でもよく見かけるような型の、やや大型の携帯ラジオ(勿論ダイヤル式で周波数が連続的に変る)をもちこんで、音楽を聞きながら仕事をしていた。ぼくはVDNKh(国民経済博)のエレクトロニクス館にテレビやステレオやラジオがたくさん並べてあったことを思い出した。ぼくは余り関心をもたず、ただざっと見て通りすぎただけだったが、郵便局のおばさんが新型の携帯ラジオをもっているところを見ると、古いタイプのラジオから新しいタイプのそれへの切換えは国民生活の中で着実に行われているのだな、という気がした。ホテルの個室にある旧式のラジオを

勝木 渥

新式のものにかえることはまだやっていなくても。

革命博物館 モスクワには革命関係の多くの博物館がある。マルクス・エンゲルス博物館、レーニン中央博物館、革命博物館、軍事博物館等。これらは入場料はただである。歴史博物館は入場料20 Kであり、類人猿や猿人の展示から始まって第2次大戦の現在にまで到るのだが、そこにも当然革命の時代の展示がある。これらの博物館をめぐり見て、ロシア革命と社会主義ソ連について一つの共通した展示のしかたがされていることに気がついた。展示には3つの力点がある。レーニン、大祖国戦争、そして戦後の建設と平和共存である。

まず、革命の指導者としてのレーニンの姿が前面に大きく打出されている。これらの博物館の展示の中にトロッキーは全然出てきていない。スターリンもほとんど姿を見せない。スターリンがあらわれるのは、ただ2ヶ所においてのみである。一つは革命前の、レーニンを長とするボルシェビキ党中央委員会の一員として若きスターリンが名を連ねている。その中央委員会メンバーの写真の中の一人として。もう一つは、ドイツが降伏しスターリンが赤の広場で勝利の演説をする、その大寫しの写真として。マルクス・エンゲルス博物館には、マルクス、エンゲルスの諸著作が、その世界の国々で翻訳出版されたものがいくつもの部屋にわたって集められ展示されており、レーニン中央博物館におけるレーニンの諸著作もまた同様であった。しかし、スターリンの著作についてはついにぼくは見かけなかった。ロシア革命の第2次大戦前の諸展示はレーニンに関するもの、帝国主義列強の干渉から革命を防衛するための人民の闘争、社会主義建設のための人民の闘争に重点がおかれていた。これが力点の第一である。

ついであらわれるのは、第2次世界大戦＝祖国防衛戦争におけるソ連人民の英雄的なたたかいである。戦いに倒れた兵士たちの数々の遺品、パルチザンの戦士たちの手製の武器、通信機、衣服、食器等々。森の中に作られたパルチザンの小屋、包囲下のレーニングラードの数々の記録、ナチスに処刑された絞首台に吊されたパルチザン戦士の写真、銃後で生産——特に軍需生産に励む労働者の写真、大戦初期の時代物の兵器と大戦中に新たに発明された近代的兵器等々。これらいわば無名というべき人民のたたかいの姿が多くのスペースをさいて展示されたいた。パルチザンとして戦いナチスに処刑されたうら若い少女の写真の前に立って、十才くらいの女の子がかの女の若い父親にその写真の

主について尋ね、父親がその写真に付された説明書をよんで少女に説明し、少女が眼に一ぱい涙をためてじっと写真をみつめる、という光景をぼくみた。以上が力点の第2であり、これが力点の第3つまり戦後の平和共存と社会主義建設へとひきつがれてゆく。

戦後の展示の中心をなすものはソ連社会主義建設の具体的成果と諸国民との平和共存である。大規模な近代化された炭坑、近代化された化学工業、原子力工業、大発電所、電子工業、宇宙開発等々の写真、模型、あるいは機械の実物、製品の実物、コルホーズの生産物、ひろびろとしたコルホーズの写真、非常に精巧・緻細な民芸品、都市に林立する高層建築物やアパートの写真や模型、都市計画の構想とその模型、学校で勉強する子供たちの写真、こういうものが大きなスペースを占めて展示されていた。平和共存もまた大きく打出されていた。ソ連政府の展開している平和共存外交政策とそれに関係した写真などは勿論大きくかけられているが（フルシチョフもほとんどあらわれて来ないが、平和共存外交と関連して、フルシチョフとブルガーニンがインドを訪れてネール首相と交歓している大きな写真がマルクス・エンゲルス博物館に展示してあったと記憶する）、世界の反戦平和擁護闘争の写真も数多く、大きく展示されていた。世界の国々から寄せられた手紙やよせ書なども随所に展示してあった。

革命関係の博物館にトロッキーやスターリンが全然もしくはほとんど現われて来ぬことをもって、ソ連人民の前に革命の真実の歴史が隠されていると人はいたがるであろう。それは、いつか明らかにされる時が来るにちがいない。ぼくは、むしろここに述べたような展示の仕方の中に、第2次大戦前の部分には若干の不満を覚えつつも、そこに示されたソ連指導部の姿勢と方向性にはある種の共感を抱きえた。それはまず第一に、現在のソ連社会を、ソ連労働者階級と人民によって、革命に対する帝国主義列強の干渉から、そして祖国防衛戦争の中でファシズムから、守り抜かれたものとして把握している点である。ソ連のこの歴史を全く忘れ去ったようなソ連批判は、真に批判の名に値するような批判にはなり得ないだろうと思う。第2に両体制間の平和共存に対する真剣な姿勢である。この平和への志向はソ連人民の間にあまねく行きわたっているといってもよいであろう。モスクワ滞在中、ぼくは何度かホテルのレストランで食事をした。一人旅だからいろいろな人と相席になった。レストランには宿泊者だけでなくまちの人も来る。ぼくが日本から来たというと、かれらはきく。東京からか？ 否。では広島か？ ぼくに出身のまちを聞いたほとんどの人が、東京か、そして広島か、ときくのだった。

勝木 渥

そして、食事をしながら、ザ・ミール（平和のために）とってはぼくと顔を見合わせ
て乾盃するのだった。

革命の新聞も展示してあったが、それらの題字を見ているうちに、ぼくは一つの発見
をした。ぼくらはロシア語の「イ」としてはNを裏返した字体のものしか知らないが、
革命前にはローマ字の i と同字体の「イ」もあつたらしいのである。形容詞の語尾には、
Nの裏返しでなく、！の方の「イ」が使つてあつた。

観光案内書 国際会議のとき参加者に配られたものの中に、予稿集の他に赤表紙のポ
ケット版の「MOSCOW」という観光案内書が入っていたが、この本は大きさも手ごろ
で実に便利である。とくに要所要所の地図が絵図として実に役立つ。スケッチも簡にし
要を得ていて、絵と実物がすぐ結びつく。これと簡単な市街地図を併用すれば大体自分
がどこにいるか分る。まだ捨てずにとってある人には、いつの日かのモスクワ旅行の
ときのために保存しておくことをおすすめしたい。だれか知人がモスクワに行くよ
うなことがあつたら、貸すか贈るかすればかならず感謝されよう。簡単な市街地図やバス路線
図はわりあい容易に入手できるが、この本がモスクワの街角のキオスクないし本屋でい
つでも直ちに入手できることは限らぬからである。

出国税 帰国の日が近づいてきた。ぼくは丹生さんから、この前訪ソした時の帰り機
内もちこみの荷物まで杓子定規に計量され、計量オーバーした本を見送りの人に頼んで
日本に郵送してもらった、という話をきいたので、郵送できる本はできるだけホテルの
郵便局から送って（本や書類の発送は手軽にホテルの郵便局からできる。荷造りも郵便
局でしてくれる。本や書類以外のもの、例えば衣類などは、都心部にある中央郵便局に
行かなくてはならない）、荷物を軽くするように努めた。下着を何枚か重ね着し、上衣
や外套のポケットに傘や洗面道具や辞書をつめこみ、携行したい本を2冊ほど風呂敷に
包んで腹にまいて、機内持込み分も含めて計量荷物の重量が20 kg をきるように宿で何
度も予行演習をした。

いよいよ帰国の日、入国時の税関の手続きにかなり時間がかかったことを思い、かな
り早目に空港につくように車を手配した。どうせ退屈して時間をつぶすなら、ホテルで
時間をつぶすより空港に早く着きすぎる方が気のもめ方は少ないだろうと思った。イン

ツーリストのホテル代の中には空港＝ホテル間の往復の自動車代が含まれているのだが、ぼくは途中で大学ホテルに移ったために、帰りの空港までのタクシー代は自前だった。メーター料金は1カペイカずつ準連続的にあがってゆく。結局7ルーブリ弱ほどかかった。10月19日だったが、雪がふりしきり、日本の真冬のような(ただし松本の真冬のようなではない)風が吹いていた。

空港についてからも、一度ホテルでの予行演習通りのスタイルをとり、待合室の秤で計量荷物の重量20kgを少しきることをたしかめておいた。チェック・インは出発時刻の1時間前から始まった。ロンドン始発のモスクワ中継東京行きのもので、モスクワからの乗客はほんの数人であり、チェック・インはほんの数人であり、チェック・インはほんの数分ですんでしまった。機内もちこみ荷物は計量の対象とならなかった。両替、外貨の申告もほとんど時間がかからなかった。何か忘れたことがありそうな気がしなげら階段を昇って出国ゲートに達し、査証と旅券の検査も終って出国した。50歩ほど歩いたあとで、はっと忘れていたことを思い出した。1ルーブリ50カペイクの出国税をはらうのを忘れたまま出国してしまったことを。(ただし、このことはロシアにも茗荷があることを必ずしも意味しない。)